
Ice?cream

綾未玲 奏音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ice?cream

【Nコード】

N1885T

【作者名】

綾未玲 奏音

【あらすじ】

ある日、アイスクリームを買いに、コンビニへ行った未美。しかしそこで出会ったのは、アイスクリームより甘い王子様、爽人だった！

天然な未美と、かっこいいのになぜかモテない爽人。お互いに初恋なのに、どちらとも「好き」と言い出せない。そのうち、二人のあいまいな態度は誤解を生み出してしまふ。

抹茶のように、ほろ苦い恋？

チョコレートのように、ちょっとビターな恋？
ストロベリーののように、甘酸っぱい恋？
それとも、バニラののように、甘くて優しい恋？

二人が迎える結末は？

OPENING代わりのアイスクリーム（前書き）

「書きたい、書こう！」

ではじめちゃった新連載です。

アイスクリームのような、甘い恋を書きたいと思います。

章タイトルは、いつもアイスの種類です。

なので、味を考えながら、またはそのアイスを食べながら読んでいただく、共感してもらえるかも……です。

少しでも幸せな、甘い時間を過ごしていただけるように、書いていきたいです。

OPENING代わりのアイスクリーム

【未美side】

蒸し暑い、ある曇り空の梅雨の日。

わたし、桜田 未美は、五百円玉を持って、コンビニへ走っていた。汗で、服がべつとりとまとわりつくが、それにはお構いなし。

目指すものを手に入れる以外の事は、興味なし。

大好きな大好きなバニラアイス。

わたしが欲しいのは、ただそれだけ。

アイスを食べようと思ったのは、学校だった。

今日の体育で校庭を走り回っていたとき、ふと「バニラアイス食べたいな……」と考えたのだ。

暑い中を運動していたので、体中がほてっている。体の内側から冷やしたら、どんなに気持ちいいだろう。

すでにわたしの頭には、それしかなかった。

帰ってから制服を勢いよく脱ぎ、Tシャツとジーパンを適当に着て、五百円だけ財布から出してコンビニへ走った。

そう、すべてはバニラアイスのため。

ただど出会ったのは、バニラアイスよりも甘い王子様だった。

OPENING代わりのアイスクリーム(後書き)

バニラアイスからはじまる恋です。

更新は遅いと思います。

あと、一つ一つの話は、短いです。

OPENINGがわりの小さな約束

【爽人side】

暑すぎる……。

ムシムシした天気が一番嫌いな俺の名前は、松宮 爽人という。周りからは、「イケメン」という評価をもらっていて、自慢じゃないけど、女の子から告白された回数は少ない。

ただ、それを受けたことは一度もない。

別に好きでもない女の子から告白されて、なんとなく受けるのは嫌だったのだ。

そのため、付き合ったことも、恋をしたこともない。

イケメンだからって、恋の経験が豊かかといえど、そんなことはまったくないんだから。

さつきから否定的な表現ばかり使ってしまったが、要は女の子を「好き」になったことがないのだ。

友達として、いい子だなとか、優しいなって思うことはたまにあるが、それ以上に発展しない。

そのせいなのか、最近では女の子も俺の事を「カッコイイね!」とは言ってくれるが、それつきりだ。

男友達からは、「お前、顔はいいのにな……。」だの、「いい加減好きな子ぐらいつくついたら?」だの、よく心配される。

けど、好きな子ってつくろうと思っつてつくるものか?

恋って、自然に「ああ、好きだ。」ってなるんじゃないのか?と思っっているため、焦ったりはしない。

心の底から「好き」と思える相手に出会うまで、俺はずっと待つつもり。

それにしても……。

「今日、本当に暑いよな。アイスとか置いておいたら、すぐとけそう。」

友達の一人、潤が言う。

「アイス食いたいよー！ 爽人、買ってきてー！」

「バカ言うな。自分で行け。」

「もう、冷たいんだから！」

「どっかの恋人みたいな会話、してんじゃねーよ。バリバリ疎外感あるんですけど!？」

潤と俺の会話に、もう一人の友達、翔が入ってきた。

「だって、爽ちゃまと潤は、恋人ですから。」

語尾にハートマークでもつきそうな潤の冗談に、俺はため息をついた。

「いい加減、そういうのやめたら？ いつまでたっても彼女できないぜ？」

二人にいつも言われているセリフを言い返してやったら、潤は鼻で笑ってきた。

「爽人は冗談通じないな。それに、大丈夫だよ。俺、彼女できたから。」

平然と言つてのける潤に、俺と翔は飲んでいた牛乳を吹き出しそうになった。

「まじですか!？」

「聞いてないよ!？」

「言つてないもん。」

潤のほほえみ。俺たちは即座にくいついた。

「誰？ どんな子？ 可愛い？」

「質問攻め禁止。翔は彼女いるから今教えるから、爽人も、彼女ができたら教えてやるよ。」

「一生かかっても無理だから！ 大体俺、初恋だってまだだし……。」

俺の必死の恥ずかしい抗議も、軽く受け流される始末。

「じゃあ、じゃんけんで俺に勝ったら、今すぐ教えてやるよ。そのかわり、負けたら彼女できるまで教えないプラス、アイスおごりな

「！」

「意味わかんねえ！」

とは言いつつも、出してしまった右手。

「はい、じゃんけんポン！」

「っ！ なんてことだ……。」「

こんな会話をした三時間後。

賭けに負けてアイスを買いにいったコンビニで、俺の初恋の人が待っているとは、

まだ誰も知らない運命。

出会いはコンビニで

【未美 side】

コンビニに入ると、涼しいクーラーが体を冷やしてくれた。

「いい気持ち……。」

目をつぶってしばらくその幸せにひたりながら、アイス売り場に近づく。

ガラスの仕切りを開けると、そこには一つだけ残ったバニラアイス。

(ラッキー！)

手にしようとした、その瞬間。

バニラアイスの上で、わたしの手ともう一人の誰かの手がふれた。

反射的に手をひっこめ、顔もよく見ないで頭をさげる。

「ご、ごめんなさい！」

「いや、こちらこそ。」

若い男性の声だった。それも、抜群に美しい、少し低めの声。おそろおそろ顔を上げると、わたしの胸がどきんと高鳴った。

(か、かっこいい……。)

そう。その人は、容姿がばつぐんによかったのだ。

しゅっとした切れ長の目、筋の通った鼻、そして色白の肌。

誰が見ても、「イケメン」の部類に入るであろう男性。

「あの……どうぞ。」

「いやいや、どうぞ。俺、ほかの買うので。」

「そんな、いいですよ。」

「遠慮しないでくださいよ。」

譲り合いが続く。わたしはお言葉に甘えて持って行くわけにもいかないので、必死にゆずる。

「わたし、ほかの所行くので、大丈夫です。」

コンビニの人に聞こえないように小声で言う。

すると、男性がしばらく思案して、にっこり笑った。

「じゃあ、いつそ二人でどこか行ってアイス食べませんか？」

「は……はい？」

言われている意味がよくわからなくて、首をかしげる。

「バニラアイスがおいしいカフェ知ってるんです。よければ、行きましょう。」

わたしはようやく、自分がお出かけに誘われていることに気付いた。初対面なのに、いきなり言われてびっくりだったけど、嫌ではないし、アイスは食べたいのでうなずく。

「はい。」

男性は嬉しそうに、ガラスの仕切りを閉めた。

「俺は、松宮まつみや 爽人そうと。中二です。」

「同い年なんだ。じゃあ、ため口でも呼び捨てでもいい？」

「えっ、いいけど……同い年？」

「うん、中二の、桜田未美です。」

「未美ちゃんか……あ、俺も、未美って呼んでいいの？」

「もちろんだよ、爽人。」

爽人に連れられて入ったカフェで、バニラアイスを注文したわたしたち。

待っている間、おしゃべりがはずむ。

「大人っぽいから、爽人が同い年だとは思わなかった。」

「俺も、未美は同い年じゃないって思ってた。」

爽人は、氷の入った水を一口飲む。そのしぐさが、絵になるぐらいカッコイイ。

「カッコイイ……。」

心の声が出てしまった。爽人が、げげんそんな顔をする。

「なんか言った？」

「ううん、なんでもないよ。」

恥ずかしくなつてうつむいた。その時、「お待たせしました！」の声とともに、二つのバニラアイスが運ばれてきた。

「うわ、おいしそう！」

今度の心の声は、はつきりしたものになった。爽人が、得意そうにほほ笑む。

「だろ？　ここ、本当においしいんだよ。」

「じゃあ、いただきます！」

さっそく少し四角いスプーンを手に取り、アイスを口に運ぶ。

幸せな甘みと、心地よい冷たさが、口の中いっぱい広がっていく。飲み込むと同時に、上品な香りが鼻をぬける。

「……おいしい！」

わたしがほほ笑むと、爽人は自分もアイスを口に運んだ。

「まじだ。超うまい！」

幸せそうな爽人を見て、わたしは思わず吹き出した。

「なんだよ、笑っちゃって。」

怒ったようにほっぺをふくらませる爽人がおもしろくて、また笑ってしまふ。

「笑うなっば。はやく食わないと、アイスとけるぞ。」

指さされたアイスを見てみると、確かにほんの少しだけとけそう。

「本当だ、食べちゃわなくちゃ！」

わたしの中の「急いだ」のペースで、バニラを味わいながら食べていると、先に食べ終わった爽人が切り出した。

「……あのさ、未美。」

「何？」

返事をしたあとに、キーンという冷たさが頭に響く。

頭を押さえながら爽人の方を向くと、真剣な顔をして話された。

「あの……ケータイ持ってる？」

「持ってるよ。」

あと一口分残っていたアイスを食べ終わって、氷の入った水を飲む。

「あー、アイス食べた後の水って、なんでこんなにおいしいのかな……。」

つぶやきながらコップをくるくるまわす。氷が、カランカランと涼

やかな音をたてて、コップの中を回る。

爽人はそんなわたしを見ながら、もじもじしながら言った。

「メアドと番号、教えてくれない？」

「へっ？」

コップをまわしていた手がとまる。爽人の顔が、恥ずかしそう。

「その……もっと仲良くなりたいなと思って……。」

その申し出に、わたしは少しだけ悩んだ。

流れがはやすぎる気がしたけど、同い年だし、悪い人には見えないし……。

結局わたしは、うなずいてケータイを取り出そうとしたが、ケータイを持たずに家を出てきたことに気づいた。

わたしが持つてきたのは、五百円だけ。

「ごめん、じゃあ必ずメールするから、アドレス書いて渡してくれない？」

手を合わせて頼むと、爽人は紙のお手拭を一枚抜き出し、

「わかった。」

シャーペンを取り出して、さらさらと書きつけていった。

かっこいい爽人がかっこいい字を書いていると、それだけでうっとりしてしまう。

「はい、どうぞ……未美？」

「あっ、はい。」

見とれていたわたしは、爽人の声にしばらく気づかなかった。

英字と数字の連なったアドレスと、十一文字の電話番号。

それを大切にポケットの中に入れてしまうと、わたしは席を立った。

「じゃあ、今日はこれで帰るね。ばいばい！」

笑顔で手を振ると、爽人は顔を赤らめながら、

「……おう。」

だけ言った。

初めての出会いは、コンビニ。

カフェで、バニラアイスクリームを食べた、この日。

わたしの初恋の物語の序章は、S-T-O-R-Yすでに始まっていた。

出会はアイスクリームとともに

【爽人 side】

「全く潤と翔のやつ、勝手な事ばかり言いやがって……。」
「ちやりんちやりんと、ポケットの中で小銭が音をたてる。」

「しかも、今日に限って部活も休みだし。」
「なんでこんなに蒸し暑い中、三人分のアイスを買わなくてはいけないのか。」

(いや、じゃんけんに負けたからだろ)

俺はすぐに自分にツッコミを入れた。途端に、むなしさが襲う。
これでは、ひどく間抜けな男じゃないか。はやくアイス買って、あいつらのところに行こう……。

走ってコンビニに行つて、アイス売り場の前に立ち、何のアイスを買つかを選ぶ。しかし、種類を選ぶのには若干の時間がかかった。

「わかんねーよ。とりあえず、俺はバニラ……。」

俺はまず、自分のアイスを取ろうとした。その時。

「ご、ごめんなさい！」

かわいらしい女の子の声がして、手がふれた。

「いや、こちらこそ。」

俺はまず、手をひいてあやまった。

そして女の子の顔をあらためて見つめる。瞬間、俺の脳に電撃が走った。

(この子、かわいい……)

その子は「美人」じゃなくて「かわいい、守ってあげたい」と思うような顔立ちをしていた。いわゆる、童顔ってやつだ。

「あの……どうぞ。」

女の子にすすめられて見た先は、俺が取ろうとしたアイスだった。しかしそれは最後の一個となっていて、女の子を前に取るのはよくないだろうととっさに判断し、俺は手を振った。

「いやいや、どうぞ。俺、ほかの買うので。」

「そんな、いいですよ。」

女の子は、意外にもあっさりを持って行ったりはしなかった。

「遠慮しないでくださいよ。」

かといって、ここで持つて行くことはできない。俺はこれでも男なのだ。女の子に譲られて受け取るようでは、プライドが許さない。ましてや、こんなにかわいい女の子を前に。

「わたし、ほかの所行くので、大丈夫です。」

すると女の子は、急に声をひそめて言った。どうやら、コンビニの人に配慮しているらしい。

そのけなげさが心をどきんとさせ、俺はつい言ってしまった。

「じゃあ、いつそ二人でどこか行ってアイス食べませんか？」

「は……はい？」

当然女の子は首をかしげる。それはそうだろう。今会ったばかりの人にいきなり二人きりでカフェに行こうなんて言われて、警戒しい方がおかしい。

しかし、別にやましい心があるわけではないので、断られたら引き下がるつもりだった。

そう。だつたんだ。

「バナライズがおいしいカフェ知ってるんです。よければ、行きましょう。」

誘ってしまったから、もう後戻りはできなくなるのと同時に、二人きりで話せるチャンスがつかめることがわかった。

こんなに魅力的な女の子と話せるなら、プライドなんてどうでもいい。

「はい。」

女の子の返事をもらった時、俺の中の「プライド」と「目の前の女の子」というてんびんは、「目の前の女の子」に大きく傾いた。

潤と翔に今のいきさつをメールを打ちあやまると、意外にも二人か

らは、

「頑張れ」

というメールが来た。

「俺は、松宮まつみや 爽人そうと。中二です。」

とりあえず、行く道で自己紹介をする。

「同い年なんだ。じゃあ、ため口でも呼び捨てでもいい？」

「えっ、いいけど……同い年？」

「うん、中二の、桜田未美です。」

未美っていうのか。響きもかわいらしい。それに、同い年だったというも俺の中のテンションをアップさせた。

「未美ちゃんか……あ、俺も、未美って呼んでいいの？」

「もちろんだよ、爽人。」

はじめて未美ちゃんに呼ばれて、飛び上るほどうれしいのをかくすようにカフェに入る。

そして迷わずバニラアイスを注文して、待っている間、おしゃべりをしていた。

「大人っぽいから、爽人が同い年だとは思わなかった。」

「俺も、未美は同い年じゃないって思ってた。」

俺が氷の入った水を一口飲むと、未美が何かつぶやいた。

「なんか言った？」

聞いてみると、未美はうつむいて答えた。

「ううん、なんでもないよ。」

その時、「お待たせしました！」の声とともに、二つのバニラアイスが運ばれてきた。

「うわ、おいしそう！」

今度の未美の声は、はっきり聞こえた。

「だろ？　ここ、本当においしいんだよ。」

「じゃあ、いただきます！」

未美が、さっそく少し四角いスプーンを手に取り、アイスを口に運ぶ。

その表情で、おいしかったんだろうという事は推測できた。

「……………おいしい！」

そのほほ笑みに赤くなりそうな頬をごまかすように、自分もアイスを口に運んだ。

「まじだ。超うまい！」

そんな俺を見て、未美が吹き出す。

「なんだよ、笑っちゃって。」

そう言われても、未美は笑いをやめない。むしろ、さらに笑っている。

「笑うなつてば。はやく食わないと、アイスとけるぞ。」

「本当だ、食べちゃわなくちゃ！」

未美がアイスを見て、いそいでスプーンを取った。しかし、そのあとの動作はあまり変わらずゆっくり。

「……………あのさ、未美。」

「何？」

耐えきれなくなつて、俺はついに切り出した。

頭を押さえながらこつちを向く未美に、俺は真剣に話した。

「あの……………ケータイ持つてる？」

「持つてるよ。」

あと一口分残っていたアイスを食べ終わって、氷の入った水を飲む未美。

「あー、アイス食べた後の水って、なんでこんなにおいしいのかな……………」

俺はそんな未美を見ながら、思い切つて言ってみた。

「メアドと番号、教えてくれない？」

「へっ？」

コップをまわしていた、未美の手がとまる。

「その……………もつと仲良くなりたいなと思つて……………」

本心がわかつてくれたのか、未美はしばらく考えたあとにうなずいた。

しかし、未美はケータイを持ちあわせていなかったようで、赤外線通信での交換はできなかった。

「ごめん、じゃあ必ずメールするから、アドレス書いて渡してくれない？」

俺は紙のお手拭を一枚抜き出し、

「わかった。」

シャーペンを取り出して、未美に読みやすいような字をこころがけて書きつけていった。

「はい、どうぞ……未美？」

ぼーっとしている未美に声をかける。

「あつ、はい。」

英字と数字の連なったアドレスと、十一文字の電話番号。

大切そうにポケットの中にしまってくれた未美を見て、ひよっとしたら……という淡い期待がうかんだ。

「じゃあ、今日はこれで帰るね。ばいばい！」

笑顔で手を振る未美に、

「……おう。」

とだけ言って、俺はカフェをあとにした。

俺たちの出会いは、バニラアイスクリームをきっかけにはじまった。それは、俺の初恋のはじまりを意味している言葉でもあった。

不安と楽しみ

【未美 side】

夕飯を食べ終わってから、爽人にメールをする。

《今日は楽しかったです。また遊ぼうね。》

絵文字もちよつと入れて、かわいくしてみた。

送信して、ケータイをいじりながら爽人の返信を待つ。

しかし、待っている時間なんて必要ないくらい、爽人の返信は早かった。

《俺も楽しかった。話変わるんだけど、未美ってご両親働いてる？わたしは、顔文字と一緒に返信した。

《働いてるよ。帰ってくるのいつも遅いから、夕飯は一人で食べてるの。爽人は？》

わたしの中であつた、「男子は返信が遅い」というイメージが崩れていくほど、爽人の返信はいつまでも早かつた。

《うちの親も遅いんだ。それで提案んだけど、明日から、一緒に飯食わない？》

「えっ!？」

思わず一人で叫んでしまった。いきなり一緒にご飯を食べようと誘われるなんて、思いもしなかったからだ。

《……迷惑?》

返信が遅かつたのを心配したのか、爽人からメールが来た。

それでもまだ返事を返せないでいると、リリリッとケータイが着信音をたてて少し動いた。

ディスプレイに表示されているのは、「爽人」。

「……もしもし。」

あ………爽人ですけど。未美?

「うん。」

メール、見てくれた?

「見たよ……一応。」

…… やつぱり、迷惑？

「ううん、迷惑ではないけど。……ちょっとお母さんに聞いてみないとわからない。」

そっか……じゃあ、お母さんの返事が来たら教えてくれる？

「わかった。」

おやすみ、未美。

「おやすみ。」

プチッ

機械音が鳴り、電話が切れた。

お母さんに聞いてみなくてはわからない、わたしの一存で決められないのは本当だったが、それ以前にわたしは少し不安だったのだ。今日会ったばかりの爽人と、明日から二人で会うのが。

爽人の事を疑っているわけでも何でもないのに、なぜだか心の中に灰色のどんよりとした雲がかかっているような感じがする。

わたしはその気持ちを振り払うように、お母さんにメールをした。

《話があるんだ、あのね……》

爽人と会った経緯をひたすら説明して、かなり長い文になってしまったメール。

《……で、誘われたんだけど、行っていい？》

そのまま送信ボタンを押して、ベッドの上に身を投げる。

目を閉じると、浮かんでくるのは爽人の事ばかり。

「どうしたらいいんだろう……。」

その時、お母さんからメールが届いた。

《いいよ。お母さんも、いつも未美に一人でご飯食べさせているのが申し訳なかったから。未美が好きなのようにしていいからね。》

お母さんは、忙しいながらもいつもわたしのことを気づかってくれている。それが文面からもわかった。

それと同時に、さっきまでの不安はキレイに取り払われた。

そしてわたしは、爽人にメールを打った。

《明日六時に、あのコンビニにいてください。わたしの家でご飯食べよう?》

爽人からの返信。

《よかった、ありがとう。了解しました。》

不安がなくなったら、反動で急に明日が楽しみになった。

「明日は、二人でご飯が食べられるんだ……。」

つぶやいてみたら、気持ちが明るくなってきてしまって、その日の夜は眠れなくなるぐらい興奮していた。

お誘いと楽しみ

【爽人 side】

「ただいま！」

家に帰ってからそう言っても、誰の返事もない。

しかし、それはただ単に親が家にいないだけ。

そのまま、キッチンに直行して夕食を作り出す。

両親共働きに一人っ子の俺は、いつもこの生活を送っていた。

いつもより上手くできた夕食を食べ終え、

「食った食った！」

なんてお腹をさすっていたら、メールが届いてケータイが鳴った。

開いてみると、一発で差出人が未美だとわかった。

《今日は楽しかったです。また遊ぼうね。》

絵文字入りの、かわいいメール。

それを見るだけで、未美の事を好きになった自分の気持ちに気付く。

恋って、こういう事なんだ。

俺は急いで返信を打った。

《俺も楽しかった。話変わるんだけど、未美ってご両親働いてる？》

また、絵文字入りのメールが来る。

《働いてるよ。帰ってくるのいつも遅いから、夕飯は一人で食べてるの。爽人は？》

未美からのメールを見て、俺はガッツポーズをした。

俺も未美も、お互いに一人で夕食を食べている。それなら一緒に食べたらどうだろう。

あやしいと思われるのを覚悟で、未美に提案した。

《うちの親も遅いんだ。それで提案なんだけど、明日から、一緒に飯食わない？》

すると、さっきまでの早かった返信が、いきなり止まった。

二分、三分……五分……。

いくら待っても、返信は来ない。

やっぱり迷惑だったのかと思い、未美に聞いてみる。

《……迷惑?》

それでも、まだ未美からのメールは来ない。

俺はついに、初めて女の子に電話をかけた。

三回目ぐらいのコール音で、すぐに未美が出た。

……もしもし。

「あ……爽人ですけど。未美?」

「うん。」

昼に会った時と変わらないテンションだったのに、ひとまず安心する。

そしてついに、本題に入った。

「メール、見てくれた?」

途端に、未美の声が暗くなる。

見たよ……一応。

何かを心配しているような、そんな声だった。

「……やっぱり、迷惑?」

一気に不安感がつつた俺は、未美にたずねる。

ううん、迷惑ではないけど。……ちょっとお母さんに聞いてみないとわからない。

とっさに出た理屈、という感じの言い方をした未美に、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

未美を悩ませてしまうなんて、最低だ。

「そっか……じゃあ、お母さんの返事が来たら教えてくれる?」

もう、未美からOKの返事が来るわけないのはわかっていた。

それでも、未美はこわばる声で返事をしてくれた。

わかった。

「おやすみ、未美。」

もしかしたら、最後の会話になるかもな。

短い恋だったな、なんて思い返しながらつぶやいた、挨拶と初恋の人の名前。

おやすみ。

プチッ

電話が切れ、機械音が鳴った。

それまでもが途切れると、自然とため息が出てしまう。

「初恋は実らない」とかよく言われるけど、まさかこんなに早くに終わってしまうとは思わなかった。

遅咲きのくせに、思わぬほどはやく散ってしまった、恋と言う名の花。

明日、潤と翔に謝って慰めてもらおう……なんて甘えた考えでいた、その時。

ケータイが受信を告げて、未美からメールが来た。

断りのメールを予想していた俺は、その文面を見て、目を見張った。

《明日六時に、あのコンビニにいてください。わたしの家でご飯食べよう?》

「嘘だろ? まじで……本当に?」

嬉しさに震える手で、返信を打つ。

《よかった、ありがとう。了解しました。》

冷静に見える文面だが、本当の俺は小躍りしている。

しばらくして落ち着いた俺は、声をあげてテンションを高くした。

「おしっ!」

とにかく、明日から俺の恋がはじまるんだ……。

初めての手つなぎ

【未美 side】

「急がなきゃ……。」

爽人をコンビニまで迎えにいつている途中のわたし。

今日学校で、昨日のことを友達のユミに報告したら、

「ロマンチックー！」

とやたらはしゃぎ、

「こんな格好で迎えに行ったらどう？」

など、いろいろアドバイスしてくれた。

ユミの言った通りに服を合わせてみると、もう時間になっていて、すぐに着て家をとびだしてきた。

はあはあと息をはずませながらコンビニに着くと、青のタンクトップに白いジーンズを合わせた服装の、爽人がいた。

「爽人！」

名前を呼ぶと、ケータイをいじっていた爽人の手がとまる。

「お迎えありがとう、未美。」

この笑顔……やっぱり素敵。

じっと見とれていたら、爽人が顔の前で手をぱっぱと振った。

「どうした？」

「え？」

「ぼーっとして。」

不思議そうな爽人。

「あっ………何でもないよ。行こう！」

わたしは恥ずかしくなって、爽人の手をひいて走った。

その途端、爽人が急に無言になった。

最初のうちは、自分も恥ずかしかったのでうしろを向けなかったのだが、あまりにも無口なので、心配になってうしろを振り向いた。

そこには真っ赤な顔でうつむいている、爽人の顔があった。

「えっ、爽人、どうしたの!？」

わたしはびっくりして立ち止まり、爽人の顔をのぞきこんだ。

「もしかして、わたしが暑い中待たせちゃったから？」

「いや……違う。」

か細い声の爽人。

「な、何？」

「手が……。」

「手？」

わたしは、未だに爽人と手がつながっていることに気付いた。

「ご、ごめん！」

手を離し、お互い真っ赤になって向かい合う。

しばらくして、どちらからともなく、言葉を発した。

「……行こうか。」

「そうだね。」

今度は手をつなはず、並んで歩いた。

その微妙な距離が、お互いの恥じらいを描いているようだった。

初めてのドキドキ

【爽人 side】

「はあ……。」

ちよつと着くのが早すぎたかな。

楽しみ過ぎて、待ち合わせより十五分早く、俺はコンビニに着いた。それにしても……。

（俺の格好、大丈夫だよな？）

少し、いや、たいそう不安に思いながら見つめるのは、翔と潤がやつてくれたコーディネート。

濃い青のタンクトップに、白いハーフパンツ。

テーマは「思いっきり！ 爽やか爽人」だそうだ。

俺はケータイを取り出して、今日の翔と潤とのメールのやりとりを読み返していた。

話は、今日の朝にさかのぼる。

今日は学校に行つてすぐ、昨日のアイスの件をあやまつた俺。

だが、返ってきたのはニヤニヤした二人の顔と、冷やかしだった。

「イケメンピュアな爽人くん、ついに初恋!？」

「しかも、かなり可愛いんでしょ？ うらやましいなあ!」

「とりあえず黙れよ。」

俺は恥ずかしくなつて、二人の頭を軽く押した。

「もう、照れちゃつて!」

二人は俺の弟みたいだ。決して褒め言葉じゃないけど。

だから、翔と潤が服を選んであげる、と申し出てきた時は、さすがに断ろうと思つた。

だけど、二人が何だか楽しそうなので、俺は断りきれず、結局二人に任せるかたちとなつてしまった。

やっぱり俺は、間違いなくあいつらのお兄ちゃん的存在のようだ。

そして、二人は部活が終わると俺の家に上がりこみ、「爽やか」な服を求めて俺のタンスをあさっていた。

途中、俺の小さい頃のパジャマ（ヒーローに変身できるやつ）が潤によって見つけられたりして、無駄な時間はあったものの、この服装になったのだ。

楽しい時間はあっという間に、でも、その楽しい時を待っている時間は、とても長い。だから、

「爽人！」

という可愛い未美の声が聞こえた時、俺はすぐさまケータイをいじるのをやめた。

声が出た方を向くと、もともとの可愛さをさらに引き立てるような格好をした未美がいた。

「お迎えありがとう、未美。」

未美に会えたのがうれしくて笑うと、未美はそれに気づかないような表情でつつ立っている。

俺は心配になって、未美の顔の前で手をぱっぱと振った。

「どうした？」

「え？」

未美が、はっと我に返ったように瞳をこちらに向けた。

「ぼーっとして。」

首をかしげながら言うのと、

「あつ……何でもないよ。行こう！」

急に未美が俺の手をとり、いきなり走り出した。

最初はわけがわからなかったが、しばらくしてつながれた手に目がいき、俺は真っ赤になってしまった。

何も話せず、何もできず。

すると、未美がこっちを振り返り、びっくりしたように立ち止まった。

「えっ、爽人、どうしたの!？」

俺の顔をのぞきこんだ未美。

「もしかして、わたしが暑い中待たせちゃったから？」

「いや……違う。」

か細い声しか出ない。

まったく、われながら情けない。

「な、何？」

俺は、やっとのことで未美に伝えた。

「手が……。」

「手？」

ぼかんとして自分の手を見る未美の表情が、一気に赤くなった。

「う、ごめん！」

手が離れて、気まずく向かい合う。

しばらくして、どちらからともなく、言葉を発した。

「……行こうか。」

「そうだね。」

今度は手をつながず、並んで歩いた。

俺は気まずさを感じながらも、あのまま未美と手をつないでいた方がよかったかも、などとバカみたいなことを考えていた。

シェフ・未美

「お邪魔します……」

「どうぞ」

わたしは、爽人の前に立って、ドアを開けて爽人を中に入れた。少し緊張気味の声で、爽人がわたしに問いかけた。

「未美……本当にご両親はOKしてくれたの？」

「もちろんだよ」

深くうなずき、どうしてそんな事を聞いたのか、不思議そうにしていると、爽人は安堵した様子で、胸をなでおろした。

「俺……未美が、無理してんじゃないかと思ったんだ」

ちよつとだけ、暗い表情が見える。

わたしは、なるべく自然な様子で言った。

「無理なんて、してないよ」

本当は、少しだけ……本当に少しだけ迷ったんだ。

でも、お母さんが許してくれたし、何よりも一緒にご飯を食べてくれるのは、爽人だし。

絶対に大丈夫。そんな安心感が、今はわたしを包んでいる。

「……そっか」

爽人は、しばらく考え込んだあと、そう言って笑った。

「さあさあ、リビングへどうぞ」

わたしはおどけたように言って、爽人をソファに座らせる。

「あのね、今日は、爽人にリクエストされたものを、作るうと思っ
の」

気分を変えるように切り出すと、爽人は途端に真剣になった。

「未美はいいって。俺が作るよ」

「気を遣わないで！ わたしはこれでも女子なんだから、男子に作
ってもらって、ただ食べるだけ、ってわけには、いかないの」

わたしはケラケラ笑いながら、ベージユのエプロンをつけた。

「大丈夫かな……」

「何、どういう心配？ わたし、料理には自信あるよ？」

ずっと一人でご飯を作って、食べて。その繰り返しだったから、料理は得意だ。

しかし爽人の心配は、別の方にあるようだ。

返事を待っていると、爽人はゆっくり首を振った。

「……いや、なんでもない」

含みのある言い方が、少し気になったけど、それもすぐに忘れた。それよりも、リクエスト。

「爽人は、何が食べたい？」

キッチンに入り、ざっと冷蔵庫の中を見て、作れそうなものと、男子の好きそうな料理を、思い浮かべる。

ハンバーグは、ひき肉がないし、できない……唐揚げなら、できるかも。

だけど、爽人が食べたい、と言ってくれるものなら、買い出しに出かけてでも作る。

いろんな想像をしていたが、爽人のリクエストは、そのどれにも当てはまらなかった。

「親子丼」

「へ？」

ハンバーグでもなく、唐揚げでもなく、親子丼。

「未美の親子丼が、食べたい」

爽人は、リクエストをし終わると、カウンターからわたしをのぞきこんだ。

「足りないものあれば、俺買ってくるよ。それに、できなさそうだったら、他のでもいいし」

「ううん、大丈夫そう」

答えてから、もう一度冷蔵庫をのぞいた。

卵、鶏肉、玉ねぎ、三つ葉……必要な材料はそろっている。

戸棚を開けて、調味料も確認……うん、全部ある。

わたしは振り向いて、爽人にほほ笑みかけた。

「それじゃあ、これから『シェフ未美・特製親子丼』を作ります！」
調子に乗って言っても、爽人は笑ってくれる。それに、

「待ってました！」

なんて、さらに乗っってくれる。

爽人といると、楽しい。

出会ってから二日目にして、少し近づいた爽人との距離。

(絶対おいしく作るんだから！)

エプロンのひもを、きゅっとしめ直して、気合いを入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1885t/>

Ice?cream

2011年12月31日15時47分発行